

姨捨山

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、しなののくに信濃国に一人のひとり殿様とのさまがありました。殿様とのさまは大そ

うおじいさんやおばあさんがきらいで、

「年としより寄はきたならしいばかりで、くに国のために何なんの役やくにも立たたない。」

といつて、七十を越こした年としより寄は残のこらず島しま流しまながしにしてしまいました。流ながされて行しった島しまにはろくろく食たべるものもありませんし、よしあつても、体からだの不自ふじゆう由とな年としより寄にはそれを自由じゆうに取とつて食たべることができませんでしたから、みんな行くとすぐ死しんでし

まいりました。国^{くに}中^{にじゅう}の人は悲^{かな}しがって、殿^{との}様^{さま}をうらみましたけれど、どうすることもできませんでした。

すると、この信濃^{しなの}国^{のくに}の更科^{さらしな}という所^{ところ}に、おかあさんと二人^{ふたり}で暮^くらしている一人^{ひとり}のお百^{ひやく}姓^{しょう}がありました。ところがおかあさんが今年^{ことし}七十になりますので、今^{いま}にも殿^{との}様^{さま}の家^け来^{らい}が来^きてつかまえて行きはしないかと、お百^{ひやく}姓^{しょう}は毎^{まい}日^{にち}そればかり気^きになつて、畑^{はたけ}の仕^し事^{ごと}もろくろく手^てがつかまませんでした。そのうちとうとうがまんがでなくなつて、「無^む慈^じ悲^ひな役^{やく}人^{にん}なんぞに引^ひきずられて、どこだか知^しれない島^{しま}に捨^すてられるよりも、これはいつそ、自分^{じぶん}でおかあさんを捨^すてて来^きた方^{ほう}が安^{あん}心^{しん}だ。」と思^{おも}うようになりましました。

ちようど八月十五夜の晩ばんでした。真まん丸まるなお月つきさまが、野のにも山やまにも一面めんに照てっていました。お百ひやくしやう姓せいはおかあさんのそばへ行いつて、何なにげ気けなく、

「おかあさん、今夜こんやはほんとうにいい月つきですね。お山のぼに登のぼつてお月つき見みをしましょう。」

といつて、おかあさんを背せ中なかにおぶつて出でかけました。

さびしい野道のみちを通とおり越こして、やがて山道やまみちにかかりますと、背せ中なかにおぶさりながらおかあさんは、道みちばたの木きの枝えだをぽきんぽきん折おつては、道みちに捨すてました。お百ひやくしやう姓せいはふしぎに思おもつて、

「おかあさん、なぜそんなことをするのです。」

とたずねましたが、おかあさんはだまって笑わらっていました。

だんだん山道やまみちを登のぼつて、森もりを抜ぬけ、谷たにを越こえて、とうとう奥おくの奥おくの山奥やまおくまで行きました。山の上はしんとして、鳥とりのさわぐ音おともしません。月つきの光ひかりばかりがこうこうと、昼間ひるまのように照てり輝かがやいていました。

お百ひゃくしやう姓くさは草の上におかあさんを下おろして、その顔かおをながめながら、ほろほろ涙なみだをこぼしました。

「おや、どうおしだ。」

とおかあさんがたずねました。お百ひゃくしやう姓りやうては両手ちを地につけて、

「おかあさん、堪かん忍にんして下さいくだ。お月見つきみにといつてあなたを誘さそい出だして、こんな山奥やまおくへ連れて来きたのは、今年ことしはあなたがもう

七十になつて、いつ島流しにされるか分らないので、せめて
 無慈悲な役人の手にかかるよりはと思つたからです。どうぞが
 まんして下さい。」

といいました。

するとおかあさんは驚いた様子もなく、

「いいえ、わたしには何もかも分かつていました。わたしはあき
 らめていますから、お前は早くうちへ歸つて、体を大事にして働
 いて下さい。さあ、道に迷わないようにして早くお歸り。」

といいました。

お百姓はおかあさんにこういわれると、よけい氣の毒にな
 つて、いつまでもぐずぐず歸りかねていましたが、おかあさんに

催促さいそくされて、すぐかえ帰って行きました。

道々みちみちす捨ててある木の枝えだを頼たよりにして歩いて行きますと、長いなが

山道やまみちにも少しも迷まよわずにうちまで帰かえりました。「なるほど、さ

つきおかあさんえだが枝おを折おって捨てて歩あるいたのは、わたしが一人ひとりで

帰かえるとき、道みちに迷まよわないための用よう心じんであつたか。」と今更いまさらお

かあさんの情なさけがしみうれしく思おもわれました。そんな風ふうでい

つたん帰かえりは帰かえつたものの、縁えん先さきに座すわつて、一人ひとりぽつねんと山

の上つぎの月つきをながめていますと、もうじつとしていられないほど悲かな

しくなつて、涙なみだがぼろぼろ止とめどなくこぼれてきました。

「あの山の上で、今いまごろおかあさんはどうしていらつしやるだろ

う。」

こう思うともうお百^{ひやくしやう} 姓^{せい}はどうしてもこらえていられなくなりました。そこで夜更^{よふ}けにはかまわず、またさっきのしおり道^{みち}をたどつて、あえぎあえぎ、おかあさんを捨て^すて来た山奥^{やまおく}まで上^あがつて行きました。そこに着^ついてみると、おかあさんはちゃんと座^{すわ}ったまま、目をつぶっていました。お百^{ひやくしやう} 姓^{せい}はその前^{まえ}に座^{すわ}つて、

「おかあさんを捨て^すてたのはやはりわたくしが悪^{わる}うございました。こんどはどんなにしてもおそばについてお世話^{せわ}をいたしますから」

といつて、おかあさんをまたおぶつて山^{くた}を下りました。

それにしてもこのままおけば、いつか役人^{やくにん}の目にふれるに違^{ちが}ひ

いありません。お百^{ひやくしやう}姓^{せい}はいろいろ考^{かん}えたあ^がげく、床^{ゆか}の下^{した}に穴^あ
 倉^{くら}を掘^ほつて、その中^{ちゅう}におかあさん^{ごぜん}をかくしました。そして毎^{まい}
 日^{にち}三度^{さんど}三度^{さんど}ごぜん^{ごぜん}を運^{はこ}んで、
 「おかあさん、御窮^{ごきゆう}屈^{くつ}でも、がまんをして下^{くだ}さい。」
 と、いろいろにいたわりました。これでさすがの役^{やく}人^{にん}も氣^きが
 つかずにいました。

二

それからしばらくすると、ある時^{とき}お隣^{となり}の国^{くに}の殿^{どの}様^{さま}から、信^{しな}
 濃^の国^{くに}の殿^{どの}様^{さま}に手紙^{てがみ}が来^きました。あけてみると、

「灰はいの縄なわをこしらえて見みせてもらいたい。それが出来できなければ、
 信濃しなの国くにを攻めほろぼしてしまふ。」

と書いてありました。その国くには大そう強つよくつて、戦争せんそうをして
 もとても勝かつ見込みみこがありませんでした。殿様とのさまは困こまつておしま
 いになつて、家来けらいたちを集あつめて御相談ごそうだんなさいました。けれどだ
 れ一人灰ひとりはいの縄なわなんぞをこしらえることを知しつている者ものはありませ
 んでした。そこでこんどは国くに中じゅうにおふれを出だして、
 「灰はいの縄なわをこしらえてさし出だしたものには、たくさんほうびの褒美ほうびをや
 る。」

と、告つげ知しらせました。

すると、何なにしろ灰はいの縄なわが出来できなければ、今いまにもこの国くには攻めら

れて、ほろぼされてしまうというので、
 国中のお百姓は
 寄^よるとさわるとこの話^{はなし}ばかりしました。

「だれか灰^{はい}の縄^{なわ}をこしらえる者^{もの}はないか。」
 こういつてさわぐばかりで、一向^{いっこう}にいい考^{かんが}えは出ませんでした。

お百^{ひやく}姓^{しょう}はふと、「これはことによつたらうちのおかあさん
 が知^しっているかも知^しれない。」と思^{おも}いつきました。そこで、そつ
 と穴倉^{あなぐら}へ行つて、おふれの出たことを詳^{くわ}しく話^{はな}しますと、おか
 あさんは笑^{わら}つて、

「まあ、それは何^{なん}でもないことだよ。縄^{なわ}によく塩^{しお}をぬりつけて焼^や
 けば、くずれないものだよ。」

といいました。

お百^{ひやくしやう}姓^{せい}は、「なるほど、これだから年^{としより}寄^よはばかにできな

い。」と心^{こころ}の中で感^{かん}心^{しん}しました。そしてさつそくいわれたとお

りにして、灰^{はい}の縄^{なわ}をこしらえて、殿^{とのさま}様の御^ご殿^{てん}へ持^もって行^いきまし

た。殿^{とのさま}様^{さま}はびつくりして、御^ご褒^{ほう}美^びのお金^{かね}をたん^くと下^{くだ}さいました。

とても出来^{でき}まいと思^{おも}った灰^{はい}の縄^{なわ}を出^だして渡^{わた}されたので、お隣^{となり}の

国^{くに}の使^{つか}いはへいこうして逃^にげて行^いきました。

三

しばらくすると、またお隣^{となり}の国^{くに}の殿^{とのさま}様^{さま}から、信^し濃^の国^{のくに}へお使^{つか}

いが一つの玉たまを持つて来きました。いっしよにそえた手紙てがみを讀よむと、
 この玉たまに絹糸きぬいとを通してもらいたい。それが出来できなければ、信しなの
のくに濃国せを攻めほろぼしてしまふと書いてありました。

殿様とのさまはそこで、その玉たまを手てに取とつてよくごらんになりますと、
 玉たまの中うちにごく小ちいさな穴あなが曲まがりくねつてついでいて、どうしたつ
 て糸いとの通とおるはずがありませんでした。殿様とのさまは困こまつて、また家来けらい
 たちに御相談ごそうだんなさいましたが、家来けらいたちの中うちにもだれ一人ひとり、こ
 の難題なんだいをとく者ものはありませんでした。そこでまた国くに中じゅうへお
 ふれを出だして、曲まがりくねつた玉たまの穴あなに絹糸きぬいとを通とおす者ものがあつた
 ら、たくさんの褒美ほうびをやると告つげ知しらせました。これでまた国くに
 中ゆうのさわぎになりました。けれどやはりだれにも変かわつた智恵ちえ

の持ち合わせはありませんでした。

すると、こんどもお百姓ひやくしやうは穴倉あなぐらへ行つて、おかあさんに相談そうだんをかけました。おかあさんは笑わらつて、

「何でもないことだよ。それは、玉たまの片かたかたの穴あなのまわりにたくさん蜂蜜はちみつをぬつておいて、絹糸きぬいとに蟻ありを一匹びきゆわいつけて、別の穴あなから入れてやるのです。すると蟻ありは蜜みつの香りかおを慕したつて、曲まがりくねつた穴あなの道みちを通とおつて、先さきへ先さきへと進すすんでいくから、それについて糸いともこちらあなの穴あなから向むこうの穴あなまでつき抜ぬけてしまうようになるのだよ。」

といい聞きかせました。

お百姓ひやくしやうはそう聞きくと小踊こおどりをして、さつそく殿様とのさまの御殿ごてん

へ行つて、首尾よく玉の中へ絹糸を通してお目にかけました。

殿様はびつくりして、こんどもお百姓にたくさん、御褒

美のお金を下さいました。

お隣のお使いは絹糸のりっぱに通つた玉を返してもらつて、

へいこうして逃げていきました。その使いが帰つて来ると、お隣

の国の殿様も首をかしげて、

「信濃国にはなかなか知恵者があるな。これはうっかり攻めら

れないぞ。」

と考えていました。

こちらでも、さすがにこれで敵もあきらめて、もう来ないだろ

うと思つていました。

四

ところがしばらくすると、またお隣の国の殿様から、信濃国へお使いが手紙を持って来ました。手紙といつしよに二匹の牝馬を連れて来ました。

「いったい馬なんぞを連れて来てどうするつもりだろう。」とびくびくしながら、殿様が手紙をあけてごらんになりますと、二匹の馬の親子を見分けてもらいたい。それができなければ、信濃国を攻めほろぼしてしまふと書いてありました。殿様はまた、連れて来た二匹の馬をごらんになりますと、大ききから毛色

まで、瓜^{うり}二つといつてもいいほどよく似た馬^{うま}で、同じような元氣^{げんき}ではねていました。殿様^{とのさま}はお困^{こま}りになつて、また家来^{けらい}たちに御^ご相談^{そうだん}をなさいました。それでもだめなので、また国^{くに}中^{じゆう}におふれを回^{まわ}しまして、

「だれか馬^{うま}の親^{おや}子^こを見^み分^わけることを知^しつてゐるか。うまく見^み分^わけたものには望^{のぞ}みの褒^{ほう}美^びをやる。」

と告^つげしらせました。

また国^{くに}中^{じゆう}の大き^{おほ}き^{もの}な^{もの}になつて、こんどこそうまく当^あてて、御^ご褒^{ほう}美^びにありつこうと思^{おも}う者^{もの}が、そろそろ殿様^{とのさま}の御^ご殿^{てん}へ、お隣^{となり}の国^{くに}から来^きた二匹^{ひき}の牝^{めう}馬^{うま}を見^みに出^いかけました。ところがよほど見^み分け^{わけ}にくい馬^{うま}と見^みえて、名^な高^{たか}いばくろうの名^{めい}人^{じん}でも、やはり首^{くび}

をかしげて考え込むばかりでした。そこでお百ひやくしやう姓はまた穴あなぐ倉くらへ行つて、おかあさんに相談そうだんしますと、おかあさんはやはり笑わらつて、

「それもむずかしいことではないよ。亡なくなつたおじいさんに聞きいたことがある。親子おやこの分わからない馬うまは、二匹ひきを放はなしておいて、間あいだに草くさを置おけばいい。するとすぐ草くさにとりついて食たべるのは子供こどもで、ゆるゆると子供こどもに食たべさせておいたあとで、食たべ余あましを食たべるのは母はは親おやだということだよ。」

と教おしえました。

お百ひやくしやう姓は感かん心しんして、さつそく殿との様さまの御ご殿てんへ行つて、

「ではわたくしに見み分わけさせて下くださいまし。」

といつて、おかあさんに教おそわつたとおり、二匹ひきの馬うまの間に青あおく草くさを投なげてやりますと、案あんの定じよう、一匹ひきががつがつして草くさを食たべる間あいだ、もう一匹ひきは静しずかに座すわつたままながめていました。それで親お子こが分わかつたので、殿との様さまはそれぞれに札ふだをつけさせて、

「さあ、これで間ま違ちがいはないでしょう。」

といつて、使つかいにつきつけますと、使つかいは、

「どうも驚おどろきました。そのとおりです。」

といつて、へいこうして逃にげていきましました。

殿との様さまはこれでまつたく、お百ひやく姓しやうの智ち恵えに心こころから驚おどろいてし

まいました。

「お前まえは国くに中じゆう一いちばんの智ち恵え者しやだ。さあ、何なんでも望のぞみのものを

やるぞ。」

とおつしやいました。お百^{ひやくしよう}姓^{せい}はこんどこそ、おかあさんの命^{いのち}ごいをしなければならぬと思^{おも}つて、

「わたくしはお金^{かね}も品物^{しなもの}もいりません。」

といいますと、殿様^{とのさま}は妙^{みょう}な顔^{かお}をなさいました。お百^{ひやくしよう}姓^{せい}は

すかさず、

「その代^かわりどうか母^{はは}の命^{いのち}をお助^{たす}け下^{くだ}さい。」

といって、これまでのことを残^{のこ}らず申^{もう}し上げました。殿様^{とのさま}は

いちいちびつくりして、目^まを丸^{まる}くして聞^きいておいでになりました。

そして灰^{はい}の縄^{なわ}も、玉^{たま}に糸^{いと}を通^{とお}すことも、それから二匹^{ひき}の牝馬^{めうま}の親^お子^こを見分^{みわ}けたことも、みんな年寄^{としより}の智恵^{ちえ}で出来^{でき}たことが分^わかる

と、殿様とのさまは今更いまさらのように感心かんしんなさいました。

「なるほど年寄としよりというものもばかにならないものだ。こんど度た々びたびの難題なんだいをのがれたのも、年寄としよりのお陰かげであつた。母親ははおやをかくした百姓ひやくしやうの罪つみはむろん許ゆるしてやるし、これからは年寄としよりを島流しまながしにすることをやめにしよう。」

こう殿様とのさまはおつしやつて、お百姓ひやくしやうにたくさんごほうびの御褒美ごほうびを下くださいました。そして年寄としよりを許ゆるすおふれをお出しだになりました。国くに中の民たみは生き返かえつたようによろこびました。

お隣の国となりくにの殿様とのさまもこんどこそ大丈夫だいじやうぶと思おもつて出だした難題なんだいを、またしてもわけなく解とかれてしまったのでがつかりして、それなりしなののくに信濃国せを攻せめることをおやめになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

姨捨山

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>